

校名：静岡大学教育学部附属静岡小学校

所在地：〒420-0856 静岡県静岡市葵区駿府町1-94 電話番号：054-254-4666

記載日：平成28年5月17日

記載者：下橋 一徳

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

創立141年目を迎える本校は、40年以上にわたり、「自らをきりひらく子」を学校教育目標として掲げてきている。「自らをきりひらく」ということは、自らの道、自らの将来、自らの運命などを自らの力できりひらくことである。これは、教育の本質であり、いかなる時代であろうとも、どのような学校であろうとも目指すべき子どもの姿だと考える。

したがって、子どもの可能性を信じ、子どもの能動性を大切にし、子どもの能動的な活動を見守り、支える教職員集団として、「まず、子どもありきの教育観」を重要視している。子どもの試行錯誤、子どもの失敗、子ども同士の議論を大切にし、子ども自らが生み出してくることに価値をおいている。教科授業研究においても、「学びとは、学ぶとは何か」を根幹においたテーマで授業づくりを進めており、現在は新研究主題「夢中になる」のもと、子どもの能動的な学びを追求している。教科外の活動においても、異年齢集団活動である「グループ活動」や3年生以上の全クラスが企画する「つどい」など、子どもの能動的な活動を大切にしている。

このように全ての教育活動において、子どもの能動性を重要視し、子どもたちが「自らの道、自らの将来、自らの運命」などを自らきりひらく人」に成長してくれることを願っている。

さらに、「主体的な生活を創造する子」を教育目標とする附属幼稚園、「自主独立」「真善美」を校訓とする附属静岡中学校と目指す子どもの姿を共有し、幼小中一貫教育を進めている。

貴校の卒業生の活躍状況について：

本校は、創立141周年を迎え、多くの優秀な卒業生を世に送り出してきた。卒業生の多くは、隣接する静岡大学教育学部附属静岡中学校に連絡入学している。

卒業生の活躍状況を学校として追跡調査していないが、同窓会組織がしっかりとしており、学校への協力体制が強くてできている。各界にて活躍している卒業生に現在の在校生の学びへの協力等を仰いでいる。

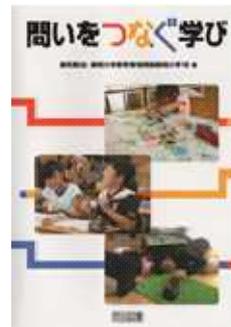
貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校の勤務経験者の多くが、本務地である市町の学校や教育委員会等で中心的な役割を担っている。特に追跡調査はしていないが、OB会組織があり、年に一度講演会を開催し、現職との交流、情報交換を行っており、管理職や指導主事として、現職にアドバイスをしている。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

① 実証的・実践的な研究をもとにした「教科教育」

本校の校風・特色は、まさに長年にわたる「アクティブラーニング」の追求である。平成23～27年度に研究をすすめた「問いをつなぐ学び」は、一般的な「課題解決型（追求型）」のアクティブラーニングを発展させた「課題創出・継続型」のアクティブラーニングであり、「21世紀型能力」「キーコンピテンシー」等の次期学習指導要領との関連から、多くの先生方に興味を持っていただいた。平成27年6月には、刊行本「問いをつなぐ学び」を発刊した。



平成28年度は、改めて「学びとは、学ぶとは何か」を問う「夢中になる」を研究主題として掲げ、研究を進めている。今後はこの研究を通して、「学習観」・「子ども観」・「教育観」の転換を問いかけていく。

② 「ICT 機器の効果的な活用」

一昨年より、富士通の「明日の学びプロジェクト」に参加し、共同研究を進めている。各教科において、子どもが能動的に学ぶための効果的な ICT 機器の活用の実践を重ねている。日常的な ICT 機器の



活用だけでなく、他県や他国等の遠隔地と学び合う実践も進めている。各教室には、プロジェクターとスクリーンを兼ねたホワイトボードが常設され、子どもが一人一台のタブレットパソコンを活用できる環境も整っている。



③ 異年齢集団による「グループ活動」(グル活)・・・朝霧キャンプ



毎年7月末に、静岡県富士宮市にある朝霧野外活動センターにて、4・5・6年生が2泊3日のキャンプを行う。このための異年齢集団活動を「グループ活動」と呼び、15グループにわかれ、6年生のグループ長を中心に4月末より活動を進めていく。グループの目標、旗、ワッペン作りから、朝霧本キャンプに向けた活動をすべて子ども主体に進めていく。経験知のある6年生が、先を見通した計画をたてリードするが、下級生も「自



ができることを見つけ、行動する」ことを目標に、自分なりの「グル活」「朝霧本キャンプ」にしていく。6年生が自ら下級生に「6年生としての思い」を伝え、「附属静岡小を繋げていく」ことが下級生の来年への能動性・夢につながる大切なことだと考えている。

④ 学級集団で自分たちの思いを全校児童に伝える「つどい」



3・4・5・6年生は、学級単位で全校児童に向けて、自分たちの様々な思いを伝える集会「つどい」を企画・発表する。30分程度の枠で全てを子どもが企画し、全校児童に見てもらおう。劇仕立てのもの、運動型のもの、音楽型のもの、それぞれ工夫をこらし、全校児童に訴えかける集会である。1・2年生も全校を対象にはしていないが、自分たちの学年内で子どもの企画



で学年つどい（集会）を開催している。

⑤ 「和田島宿泊体験学習」

3年生が、毎年秋に静岡市清水区の清水和田島少年自然の家において、1泊2日の宿泊体験学習を行っている。初めての集団宿泊を経験すると共に、沢登り・ハイキング・ウォークラリー・キャンドルサービスを仲間と共に企画・運営することを通して、仲間の良さや協力することの楽しさ、自らの役割に責任を持つことを学んでいく。この活動が4・5・6年生のグループ活動（キャンプ）につながっていく。



⑥ 愛おしい思いやあこがれの思いを育てる「相棒活動」



年間を通して、1・6年生、2・5年生、3・4年生をペアとして、一人一人相棒をつくり、活動していく。4月の「相棒手つなぎ遠足」、秋の「相棒芋掘り」や「相棒芋料理大会」を始め、日常的にも子どもたちが自分たちで相棒活動を企画・運営していく。こうした活動を通して、上級生は上級生とし



での責任感を感じると共に、下級生に愛おしさを感じる経験を積む。また、下級生は上級生にあこがれの気持ちを持つことで、自らの目標を持つことや感謝の気持ちを持つことができる。

⑦ 自分の思いを自由に綴る「日記活動」

1年生から6年生まで、「自由なテーマ」「自由な長さ」で毎日日記を綴っている。2冊の日記帳を用意し、教師は児童の下校後に子どもの日記を読み、次の日に返却している。自由記述の日記を綴り続けることは児童の表現力の向上はもちろんのこと、教師も常に児童の自然な表現の素晴らしさに気づかされると共に、子ども理解の大きな手段となっている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

① 先進的な研究校として

アクティブラーニングの先進校として、昨年度の研究発表会には多くの参加者を得ることができた。更に富士通との共同研究で進めている ICT 機器の活用においては、各教育委員会もその環境整備を進める上での参考にと、研究発表会以外の日程でも訪問が多かった。今後も、公立小学校や各教育委員会が参考としたい先進的な取り組みを進めていきたい。

② 本校の校風をもとにした教育のあり方の発信を

本校の保護者は、本校出身の方が多い。本校の校風、学校教育目標「自らをきりひらく子」を基盤とした教育に理解を示し、子どもにもぜひその教育をとという親が多いのである。そして、本校の教育が、地域を支える人材育成に大きな貢献を果たしていることにも影響していると考ええる。新たな教育へ目を向けると共に、温故知新を忘れず、教育の本質を追究し、今後はさらに発信力を高めていく必要があると考える。

③ 教職員の広域人事交流・教員研修の拠点として

本校の人事交流の範囲は、公立小学校の交流の範囲を大きく超えており、静岡県の東部(伊豆・下田)から西部(掛川市・菊川市)に及んでいる。各教育委員会や管理職のご理解とご努力下、各地域から優秀な人材が本校に赴任するため、各地域ならではの教育を交流することができる。本校でさらに研究を積み、本来の所属地に戻り、各地域での教育をリードする教育者として育てている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

① 大学教育学部がより実践的な学問の場となるために

近年、新規採用教職員の退職や精神疾患等による休業が増えてきている。また、大量交代期になり、採用されてすぐに多くの役割を持たされるようになってきている。子どもの特別な支援の課題や保護者の多様な価値観等の問題からも、現場ですぐに生きる実践力が必要になる。短期的(定期的)な教育実習だけでなく、教育現場における学生や教授による「より実践的な研究」が必要になると考える。現在、本校でも大学院生による実践研究や学生ボランティアによる教育実践、教科教授との定期的な実践研究が行われている。世界に自慢できる「日本教育の質」、「日本の教職員の質」を保つためにも、大学教育学部と附属学校の連携を更に強める必要があると考える。

② 伝統ある教育、先進的教育の地域における広告塔として

地域で教育に深い関心をもつ親は、附属学校の伝統と先進性を求める。それは相反するものではなく、温故知新の思いを強めるものである。教育の本質を見失わず、新たな時代を切り開く学校を求めているのである。管理職の方針だけで変わりゆくものではなく、大学というバックボーンをもち、伝統に裏打ちされ、しかも新たな教育に目を向ける学校として、地域の広告塔となる必要がある。

